

## 日本語教育実践研究 (10)

宮崎 里司

日本語教育実践研究 (10) は、「言語習得」の実際を、教室内外の接触場面で実際に検証し、自らの研究トピックに昇華していくためのクラスです。インターアクション能力の習得のためには、さまざまなクラスでの実践が望ましいと思われませんが、ここでは、主に上級レベルの文章表現クラスを対象にした実習を行います。

これまでの受講生は、言語習得研究室に在籍する院生だけではなく、言語習得と日本語教育の関連について、具体的な実践の場で学びたい他研究室からも参加がありました。このクラスでは、主に大学場面で遭遇する、文章表現に関するインターアクション問題を、書くという作業を通して解決していきますが、具体的には、上級レベルの表現系能力のひとつである、文章表現の習得方法を、学習ストラテジーのトレーニングを通じて、自律的にデザインする方策を見出させ、どうすれば「一人歩き」できる学習者が養成できるかといった支援方法を考えます。そのために、レポート、研究計画をはじめとする能力の開発のために、自らの問題点をモニターしながら、その解決に向け、教師や、日本人大学院生とネットワークを形成しながら、文章表現能力を向上させていく活動を行ってきました。

言語習得場面は、教室場面に限らず、それ以外での接触場面で起きるインターアクション問題について、学習者が自らの習得をどのように管理し、どのように解決していくかも視野に入れる必要があります。そのため、別科クラスで学ぶ留学生との、積極的なネットワークを形成し、習得過程のモニターやフィードバックといったメタ認知ストラテジー能力の開発が必要となってきます。さらに、学習者自身が、自らの学習を意識化していくという機会を持つために、ジャーナルアプローチ（言語学習日記）を導入しています。毎回授業終了後、その日の授業の感想をはじめ、自分の日本語学習に対する気持ち、学習方法、問題点、日本や日本語に関する興味、質問事項などを自由に書いてもらう言語学習日記は、学習者が自己評価を行うことによって、学習の改善をはかる手助けになるばかりでなく、受け身的な学習から、少しずつ自分の学習を変容させていく機能をもたせる役割もあります。また、これは、学習活動の工夫や学習者の要望への対応など、学習者側に視点をおいた授業への構えを教師に意識づける効果もあります。こうした活動を通じて、自律的な教師についても、考える機会を影響できればと考えています。

(ミヤザキ サトシ・日本語教育研究科教授)